

病害虫防除指導報

No.356

令和6年8月号

発行

秋田県農業共済組合
中央支所

1. 穂いもちの防除対策(薬剤使用上の注意点)



穂いもち

<発生状況に合わせた適切な防除を実施しましょう>

これまでのいもち病の防除対策と現在の葉いもちの発生状況により、穂いもちの防除対策は異なります。ほ場を巡回して発病状況を確認し、各ほ場の状況が次の①～③のどれに当てはまるかを判断して、対応方法を下の表より決めて下さい。

①葉いもちの発生がないほ場

育苗施設内外の衛生管理や育苗期いもち防除、本田葉いもち防除を適切に実施し、葉いもちの発生がないほ場では、穂いもち防除の必要はありません。ただし、自分のほ場で葉いもちの発生がなくても周辺に葉いもちが多発しているほ場がある場合は、出穂期～7日後までにトライフロアブル又はラブサイド剤の茎葉散布を行って下さい。

②葉いもちの発生が認められるほ場

出穂15～7日前にコラトップ1キロ粒剤12、コラトップ豆つぶ、コラトップ粒剤5、ゴウケツ粒剤/サンプラス粒剤のいずれかを水面施用するか、出穂直前(トライフロアブルかビーム剤)と穂揃期(トライフロアブルかラブサイド剤)に茎葉散布を行って下さい。

③発病苗の持ち込みにより葉いもちが多発しているほ場

前記②と同様に、出穂15～7日前までにコラトップ1キロ粒剤12、コラトップ豆つぶ、コラトップ粒剤5、ゴウケツ粒剤/サンプラス粒剤のいずれかを水面施用するか、出穂直前(トライフロアブルかビーム剤)と穂揃期(トライフロアブルかラブサイド剤)に茎葉散布を行います。さらに、それでも病勢が衰えない場合は傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行います。テブフロキン剤(トライフロアブル)の本田での総使用回数は2回、フササイド剤(ラブサイド剤)とトリシクラゾール剤(ビーム剤)の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内であるため注意が必要です。

○水面散布剤

ほ場の状況			薬剤名	使用時期	使用量又は希釈倍数
①	②	③			
	○	○	コラトップ1キロ粒剤12	出穂15～7日前	1～1.5kg/10a
			コラトップ豆つぶ		250g/10a
			コラトップ粒剤5		4kg/10a
			ゴウケツ粒剤 サンプラス粒剤		4kg/10a

○茎葉散布剤

ほ場の状況			薬剤名	使用時期	使用量又は希釈倍数
①	②	③			
○			トライフロアブル	出穂期～7日後	粉剤DL:4kg/10a ゾル・フロアブル:1,000倍[150L/10a]
	○	○		出穂直前と穂揃期の2回	
	○	○	ビーム剤	出穂直前と穂揃期の2回	
○			ラブサイド剤	出穂期～7日後	
	○	○		出穂直前と穂揃期の2回	
		○		傾穂期(必要に応じて防除)	

注1) 茎葉散布後、数日以内の積算降水量が液剤の場合200mm、粉剤の場合100mmにならなければ再散布する必要はありません。

注2) 粒剤を使用する場合は、湛水状態で田面に均一に散布し散布後4～5日間は水を入れないで下さい。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしないで下さい。

2. 斑点米カメムシ類の防除対策

<雑草管理を徹底しましょう>

病害虫防除所の予察灯における6月4半旬までの誘殺数は、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメのいずれも多くなりました。

出穂しているイネ科雑草が見られる畦畔では、出穂していない畦畔と比べて斑点米カメムシ類の発生量が多くなるため、畦畔や農道の草刈りを徹底し、発生源を断つ必要があります。また水田内にノビエやホタルイ等が多発するとアカスジカスミカメの水田への侵入を助長するため、水田内の雑草対策を徹底しましょう。

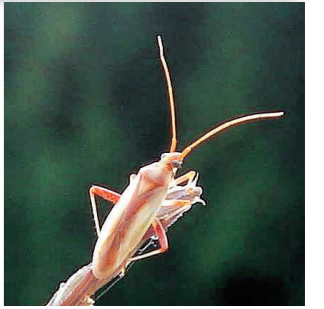
【耕種的防除法】

斑点米カメムシ類はイネ科雑草の穂や葉鞘の内側に産卵して増殖するので、畦畔や農道の草刈りを徹底し、密度低減を図りましょう。

①畦畔や農道の草刈りは、稲の出穂10日前までに実施します。また、出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布直後から7日後までに畦畔や農道の草刈りを行い、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科雑草の除去に努めます。その後、草刈りをする場合は、稲の収穫2週間前以降に行います。

②7月上旬～中旬に水田畦畔刈り込み代用剤を散布した場合、40～50日間の抑草効果が期待できます。

③法面、休耕田等の雑草地の草刈りは、稲の出穂10日前までにできるだけ地域一斉に実施します。その後、草刈りをする場合は、稲の収穫2週間前以降に行います。



アカスジカスミカメ

	6月		7月		8月			9月		
	上～下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
本田防除					1回目防除 出穂期10日後頃		2回目防除 出穂期24日後頃			
農道 畦畔	6月上旬	草刈り		稲出穂 15～10日前	草刈り 7日以内		収穫 2週間前		草刈り	収穫
法面 休耕田等	6月上旬	草刈り		稲出穂 15～10日前	草刈り 禁止		収穫 2週間前		草刈り	収穫

【薬剤による防除法】

出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接したほ場及び発生予察情報で多発が予想される場合は、以下の①及び②の茎葉散布剤により出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を必ず実施して下さい。

ただし、上記以外の場合は、①の茎葉散布剤による出穂期10日後頃の1回防除が可能です。

①1回目茎葉散布剤：出穂期10日後頃に次の薬剤を散布して下さい。

薬剤名	使用量又は希釈倍数	散布液量	散布時期
スタークル粉剤DL アルバリン粉剤DL	3kg/10a	-	出穂期10日後頃
スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10	1,000倍	150L/10a	

注1) 薬剤は畦畔を含めて散布して下さい。

注2) ウンカ類にも有効です。

②2回目茎葉散布剤：出穂期24日後頃に次の薬剤を散布して下さい。薬剤抵抗性の発達を防止するため、1回目に使用した薬剤の連用を避け、2回目はエクシード剤又はキラップ剤を散布して下さい。

薬剤名	使用量又は希釈倍数	散布液量	散布時期
エクシード粉剤DL キラップ粉剤DL	3kg/10a	-	出穂期24日後頃
エクシードフロアブル キラップフロアブル	2,000倍	150L/10a	

注1) 薬剤は畦畔を含めて散布して下さい。

注2) エクシード剤はセジロウカとヒメトビウンカに有効であるが、キラップ剤は両種に効果が劣ります。

3.大豆の病害虫防除

(1) 紫斑病

子実に紫色の斑紋が発生し品質が低下します。一般に、転換畑など過湿になりやすいほ場や結実期に雨の多い年、さらには刈取りや乾燥作業が遅れ、多湿状態になると発生が多くなります。

そのため、適期に薬剤防除を行うとともに、適期の刈取りと速やかな乾燥を行って下さい。



紫斑病

【茎葉散布剤の選択等について】

下表に示す薬剤を選択してください。ただし、ニマイパー水和剤及びプランダム乳剤25は耐性菌の出現を回避するため、各1回の使用として下さい。

【薬剤による防除法】

薬剤名	使用量 又は希釈倍数	散布液量	散布時期・回数
ジマンダイセン水和剤 注1)	400倍	150～300L / 10a	1～2回(1回防除が基本で着莢期に降雨が多い場合は2回防除) 1回目：開花期20～30日後 2回目：1回目の約10日後
ペンコゼブ水和剤 注1)	400倍		
トライフロアブル	1,000倍		
ニマイパー水和剤 注2)	1,000～2,000倍		
プランダム乳剤25 注2)	3,000～5,000倍		
Zボルドー	500倍		
Zボルドー粉剤DL	3kg / 10a	—	

注1) ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意して下さい(収穫45日前まで)。

注2) ニマイパー水和剤、プランダム乳剤25は耐性菌の出現を回避するため、各1回の使用として下さい。

注3) 薬剤は莢によく付着するように散布して下さい。

(2) マメシクイガ

ふ化幼虫が莢内に食入し「クチカケ豆」を作ります。連作で被害が多くなり、水田転換畑では、作付け2～3年以降に被害が増大します。そのため連作ほ場では、特に注意が必要です。

【散布時期】

アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤 8月下旬～9月上旬(1回)
他の薬剤 9月上旬(1～2回)



マメシクイガ(幼虫)

(3) カメムシ類

本県で大豆を加害するカメムシ類は、着莢頃から黄熟期まで子実を吸汁加害します。莢及び子実への被害は落莢、不稔粒、板莢や歪曲、変色粒など加害時期によって異なります。初夏～盛夏が高温多照の年に発生が多くなります。

【散布時期】 8月中～下旬(1～2回)

【薬剤による防除法】

対象病害虫		薬剤名	使用量 又は希釈倍数	散布液量	
マメシクイガ	カメムシ類				
○	○	トレボン粉剤DL	4kg/10a	—	
○	○	アグロスリン乳剤 注2)	2,000倍	150～300L / 10a	
○	○	エルサン乳剤	1,000倍		
○	○	スミチオン乳剤 注3)	1,000倍		
○	○	トレボン乳剤・EW	1,000倍		
○	○	パーマチオン水和剤 注2)	2,000～3,000倍		
○	○	プレバソンフロアブル5 注3)	4,000倍		
○	○	アディオオン乳剤	3,000倍		
○	○	グレーシア乳剤	2,000～3,000倍		
○	○	【無人航空機散布】	8倍		0.8/10a
○	○	トレボンスカイMC 注3)	16倍		1.6L/10a
	○		8～16倍	0.8L/10a	



ホソヘリカメムシ

注1) 薬剤は莢によく付着するように散布して下さい。

注2) アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤の8月下旬散布は、マメシクイガにも有効である。

注3) 無人航空機で防除する場合は、2回散布が必要となります。ただし、トレボンスカイMCは無人航空防除のみです。

(4) フタスジヒメハムシ

結実後の8月下旬～9月下旬に成虫が莢をなめるように食害し、食害された莢の直下の子実表面が黒変するため品質が低下します。連作ほ場で発生量が多くなります。

【薬剤による防除法】

薬剤名	使用量 又は希釈倍数	散布液量	散布時期
トレボン粉剤DL	4kg / 10a	—	8～9月 (着莢期～子実肥大期)
アグロスリン乳剤 トレボン乳剤	2,000倍 1,000倍	100～300L / 10a	



フタスジヒメハムシによる黒斑粒

(5) ウコンノメイガ

本県で発生源となる成虫は長距離移動による飛来侵入が主体であり、生育の旺盛なほ場に好んで産卵する傾向があります。卵は葉脈に沿って産み付けられます。幼虫は油状光沢があり、葉縁を巻き込んで食害します。幼虫は一枚の葉では生長することができず、別の葉に移動し数枚の葉を綴り合わせて食害します。要防除水準は、7月6半旬に、ほ場全体で40～60莖の葉巻数を調査し、莖当たり葉巻数が1.3個以上です。これを目安に8月上旬までに防除を行って下さい。



ウコンノメイガによる葉巻

【薬剤による防除法】

薬剤名	使用量 又は希釈倍数	散布液量	散布時期
カスケード乳剤	4,000倍	150～300L / 10a	7月下旬～8月上旬
スミチオン乳剤	1,000倍		
トレボン乳剤	1,000倍		
プレバソンフロアブル5	4,000倍		

(6) ダイズサヤタマバエ

ダイズサヤタマバエは体長3mm程度の小さなハエで外見は蚊に似ています。卵は若莢に産みつけ、幼虫は莢内を食害します。被害部は莢が伸長せず小さいコブ状となります。羽化脱出時の脱皮殻が莢から半分出た形で残るのが特徴です。

【薬剤による防除法】

薬剤名	使用量 又は希釈倍数	散布液量	散布時期
アルバリン粉剤DL スタークル粉剤DL	3kg / 10a	—	開花期10日後頃 (1回)
スミチオン乳剤 トレボン乳剤	1,000倍	150～300L / 10a	
アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	2,000倍		
ダイアジノン粒剤5		6kg / 10a	



ダイズサヤタマバエの脱皮殻

注) 粉剤DL、乳剤、顆粒水和剤は莢によく付着するように散布して下さい。